

岐路に立つドイツ政治

東京大学法学部・大学院法学政治学研究科教授 板橋拓己

- *タブー視してきた極右との連立
- *「信号連立」と呼ばれたショルツ政権
- *ロシア・ウクライナ戦争の打撃
- *好調だった経済が2年連続のマイナス成長に
- *選挙戦で最大の争点になった移民問題
- *各地で発生した「右傾化反対デモ」
- *TikTok活用に長けたAfDと左翼党
- *旧東独地域で支持されるAfD
- *メルツ政権が抱えている難題の数々
- *移民2世3世の支持政党



山縣 それでは開会いたします。（拍手）
本日は、会津の経済俱楽部からたくさんの方が参加されています。実は、東京を別にして8つの経済俱楽部があるのですが、その中でも会津経済俱楽部は非常に活発に活動されておられます。心より歓迎申し上げます。

それでは講師をご紹介いたします。東京大学

法学部の板橋先生です。経済俱楽部では、大きく変動しているアメリカをテーマに取り上げることが多いのですが、一昨年来、アメリカだけ

ではなく、世界情勢に非常に重要な影響を与えている国、たとえばトルコ、オーストラリア、インド、そういう国も取り上げて専門の方にお話をいただきました。

実は、ドイツも最近非常に大きく変化してい

ます。ドイツの状況を正確につかんでいくことは大切なテーマになっていると思い、国際関係の先生に「ドイツのことを話していただけるすばらしい方はいらっしゃいませんか」とお尋ねすると、何人かの先生からお名前が挙がったのが板橋先生でした。本日、こちらに来ていただいた次第です。

最近のドイツは安全保障政策も変化があり、財政の方針も変わってきてています。日本としても参考になる動きもあるかと思います。先生は近著で『分断の克服 1989—1990——統一をめぐる西ドイツ外交の挑戦』という本を出されました。今日は中央公論新社の方に著書を持つていただいておりますので、ご関心のある方はぜひ手に取ってご覧いただければと思